

ボリビアの多文化多言語教育

重富 恵子



「しげとみ・けいこ」都留文科大講師(ラテンアメリカ地域研究)。1958年、東京都出身。青年海外協力隊員として87年から89年までボリビアに滞在。著書に「ラテンアメリカ新しい社会と女性」(共著)。

本年八月九日、国際先住民の日を記念し、ボリビアの新聞ラソン紙に、ケチユア語、アイマラ語、クアラニ語、スペイン語の四つの言語で記されたEU(欧州連合)の声明文が掲載された。長くスペインの植民地だったボリビアで使われる言語はスペイン語が主流だが、現在、多文化多言語主義教育への模索が始まっている。三種類の先住民言語とスペイン語を併記した声明文は、ボリビア史上初の先住民出身大統領であるモラレス大統領によって、EUからのエールと言えよう。

尊厳を取り戻すために

標高数千メートルの山岳地域からアマゾンの熱帯地域まで、多様な自然環境に恵まれたボリビアは、しかし中南米諸国の中でも貧しい国である。とくに農村部は貧しく、農民の多くは先住民族系の人々だ。西欧的な都市文化と比較して農村は劣っていると見なされ、国内においても植民地的な支配

価値体系に基づく発展が期待されている。いわば農村は二重の抑圧にさらされているのだ。農村部の学校教育は二十世紀初頭から始まったが、先住民文化を排し、スペイン語化による都市主流文化への同化教育が主だった。母語ならは理解も発言もできるのに、スペイン語

では授業についてゆけず劣等感を抱いて学校をやめてしまつ児童たち。小学校一年生の離学率は未だに高く、都市と農村の教育格差は是正されていない。農村部の教育改善には母語が無視できないと、村落の中で教師や市民によってさまざまな取り組みがなされてきたが、何より母語で教育できる教師や教材が不足していた。

そのような状況下、コチヤパンバ県で、農村を支援するNGO「CIPCA」とサン・シモン大学が一九九〇年から、母語教育員を養成しバイリンガル(二言語)の言語を自由に話せるこ

たが、現地の人々が中心的な役割を担った。同じ年、先住民の人々が土地保有権と差別撤廃を求めて、熱帯低地のベニ県から高地にある首都ラパスまで六百四十キロを踏破する「大地と尊厳のための行進」が行われた。すでに八〇年代には、各地の先住民団体が連合体を形成し、諸権利を求めて活動を展開していた。バイリンガル教育の取り組みは、公正な社会を求め先住民運動の高まりと期を同じって政府を動かした。九四年の教育改革法で国の教育方針に取り入れられて、児童の母語が第一言語と認められた。

コチヤパンバ県ラケイパ地域は、母語教育の導入については、時代遅れの昔の生活への逆戻りだという見方もあったという。スペイン語の習得の遅れが児童の将来に不利になると心配する教師や親もいる。しかし彼は、「これまで省みられなかったことをきちんと学べる手法だと信じて推進してきた」と話す。

プロジェクトは現在、村落教育委員の研修も手がけており、研修項目にはバイ

リンガル教育の理念、学校運営の手法の他、先住民の歴史、土地保有権等の諸権利、市民教育なども含まれている。アイマラ語教育審議会のグティエレス氏は「言語だけの問題ではない。村々が培ってきた知識、技術や世界観を学び、お互いに共有し合う。農村の活力を生かし、先住民が市民としての尊厳を得る。そのため教育なのです」と語った。

モラレス新政権は今年、バイリンガルから多文化間教育への深化をめざす新教育法案の作成を始めた。法案作成には従来の教育関係機関に加え、農民組合や各言語の教育審議会、さらに先住民内でも少数派だったアフリカ系ボリビア人団体も参加している。法案準備文の基本項目には「文化内および文化間多言語による教育」「暮らしのための、暮らしの中の教育」「民主的参加型」などが記され、先住民内の多様性を尊重し、生活に根ざした、市民参加型の教育がめざされている。

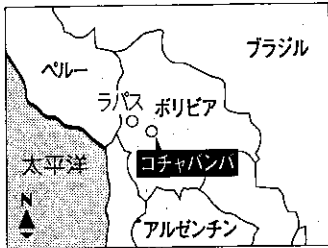
多文化間教育は、手法の開発と基盤整備が緒に終わったばかりで、課題も多い。しかし、その試みは、言葉や文化、土地を守り、地方独自の発展を模索する動きでもあるのだ。

多文化間教育は、手法の開発と基盤整備が緒に終わったばかりで、課題も多い。しかし、その試みは、言葉や文化、土地を守り、地方独自の発展を模索する動きでもあるのだ。

ピープルの地平へ

世界の市場化に抗して

22



文化

の中で差別を受けてきた。また今日では、グローバル化が進む中、経済面でも文化面でも市場指向型でメジャーなものが普及し、地方独自の生活様式や



と「教育を行うプロジェクト」に取り組み始めた。隣国ペルーではそれ以前に先だつて、ユニセフ(国連児童基金)と同国の大学、教育省などによる実験的なプロジェクトが行われていたが、ボリビアでは、以前から農村の教育改善に取り組んで

2006年1月21日、モラレス大統領の就任式に先立ち、ボリビアのティワナク遺跡で先住民の慣行に沿った儀式が行われた。モラレス政権誕生を支えた先住民の人々は伝統衣装と楽器で新大統領を迎えた(提供:インディペンデント・メディア・センター・ボリビア)

プロジェクトは現在、村落教育委員の研修も手がけており、研修項目にはバイリンガル教育の理念、学校運営の手法の他、先住民の歴史、土地保有権等の諸権利、市民教育なども含まれている。アイマラ語教育審議会のグティエレス氏は「言語だけの問題ではない。村々が培ってきた知識、技術や世界観を学び、お互いに共有し合う。農村の活力を生かし、先住民が市民としての尊厳を得る。そのため教育なのです」と語った。